

【一話完結】 メグメグとソーンの相性が良かった時の話

昼寝姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

スマホゲーム『#コンパス戦闘摂理解析システム』の二次創作。

メグソンっていいよね。わかる。

メグメグに振り回されるソーンが見たい。でもそういうのってないから書きました。

もっとメグソン好き増えて欲しい。

## 目次

ソーンがメグメグと初バトルに行く時の話	1
ソーンが13に弄ばれてる時の話	16
ソーンとメグメグと兵長がバトルする話	26
メグソン兄様固定が初期固定と出会う話	39

## ソーンがメグメグと初バトルに行く時の話

とある日の、シエアハウス。

ツートンカラーの髪が特徴的な、黒パーカーを着込んだ少女——メグメグはソファに沈み、暇を持って余していた。

がきんツと口の中に含んだ飴を噛み砕き、尖った飴で切った口内の血ごと飴を飲み込む。他のシエアハウスの住人はバトルに行つてしまつたので、恐らくしばらくは帰つてこない。シエアハウスには誰か一人、必ず留守番をしていなければならないため、今日はメグメグが居残り組なのだ。

「むー。ひまひまー！ みんなも帰つてこないし、メグメグもバトル行きたかつたのにい」

ぷくりと頬を膨らませ、メグメグは一人愚痴を零した。そうこうして、何とか一人で時間を潰していると、玄関の扉が開く音が聞こえてきた。

ソファから起き上がってみると、リビングの扉が開く。そこには、長身の男性——アダムと、見覚えのない少年が立っていた。

「ダムダムだあ！ おかえり！ もう帰つてきたの？ メグメグ、バトル行つていー？」

「只今戻りました。バトルに行く前に、少しだけお時間を頂いても？ 今日から、私の弟であるソーンがここで暮らすので、挨拶を」

「？ ダムダム弟いたの？」

嬉々として外へ飛び出そうとするメグメグに、アダムが静止の声をかける。その言葉に興味を惹かれたのか、見覚えのない少年にメグメグの視線が向かう。

真っ白な髪に、兄であるアダムと同色の瞳。緊張でか少し強張つた顔の少年が一步前へ進み出た。

「ソーンと申します。これからよろしくお願ひしますっ！」

「ソーン？ ソンソン……んー違うなー」

「？ えつと……？」

メグメグの呟きに首を傾げて、困惑の表情を見せるソーン。そんな

弟の姿に苦笑して、アダムは戸惑うソーンに声をかけた。

「メグメグ殿は人に渾名をつける方なんですよ」

「ああ、そうなんですネ！ 何か失敗したのかと思いましたが……」

勘違いに気付いて照れたような笑みを浮かべ、ソーンがほっと胸を撫で下ろす。それを見たアダムが徐に片手で顔を覆い、

「尊い」

「ダムダム何言ってるの〜?」

きよとんと目を瞬かせるソーン。アダムの言葉に、思考の海から脱出したメグメグが首を傾げた。二人の反応に通常通りのやわらかい笑みをみせ、アダムは何でもないと首を振る。他人にあまり興味のないメグメグと、天然の入ったソーンだからこそ誤魔化せる技だった。「まあいいや。ダムダムはメグメグの代わりにお留守番してくれるんでしょ? じゃあさじやあさ、ソーンはメグメグと一緒にバトアリ行こーよ!」

「メグメグ殿、ソーンは私と一緒に後で……」

「バトアリ……兄様から聞いたところですね! はいっ、頑張ります!」

「!?」

やる気満々で頷くソーンに、何故かシヨックを受けたような顔をするアダムを見て不思議に思ったものの、メグメグは特に気にしなかった。

機嫌良さげにソーンの手を掴むと、ぶんぶんと空いた方の手を振り、玄関から飛び出した。

「行つてきまーす!」

「あつ、あの、女性がみだりに男性に触れるのは……」

「? なにー?」

「い、いえ、何でもありません……」

ぐいぐいと手を引っ張るメグメグが振り向いて尋ねると、チラチラと掴まれた手を見ながら顔を少し赤く染めたソーンが俯きがちに口籠った。

様々な事情から、あまり深く人とは接してこなかったソーンにとつ

て、初対面の人、ましてや異性からここまで積極性のある行動をとられてはタジタジになるしかなかった。

ちなみに、メグメグからすればこれくらいは誰にでもやるし、特に深く考えずに、単純に早くバトルがしたいから。そんな理由でソーンの手をぐいぐいと引つ張って走っていた。

「ついた！ 固定組んで、マッチングしなきゃ！ はやくはやくー」  
「は、はい！ えっと……」

バトルアリーナ（略称バトアリ）に到着した二人は、早速バトルに行こうとする。けれど、何百何千とバトアリに来ているメグメグと違って、今回が初バトルのソーンはマッチングにまごついた。

既にチームメンバー募集の用意を終えたメグメグが見えて、少し焦り始めたソーンの背後からひよこつと画面を覗き込む影。メグメグだった。

「わあっ!？」

「ソーンおっそーい！ メグメグがやったげるから見せてね？」

ソーンの肩から顔を出して後ろから画面を操作するメグメグ。超至近距離、しかも密着状態。ソーンの心臓が跳ね上がった。

「あ、あ、あ、あの！ メ、メグメグさ……!？」

「はい終わりー!？」  
「へっ?？」

爆音をたてる心臓を抑えながら、何とか声を出そうとしたソーンの声が遮られる。メグメグの言葉に、思わずぼかんとしてしまい、それからバトルに行くための手順をわざわざ見せてくれたことを思い出し、ソーンの顔が真っ赤に染まる。

「す、すみません……ありがとうございます……」

「? いーよ?？」

恥ずかしそうな顔をするソーンに首を傾げ、視界にマッチング完了の文字が見えたメグメグはすぐさまソーンの様子を忘れ、バトルに意識を持っていく。その様子を見たソーンも意識を切り替え、程よい緊張状態へ移行する。

そして、二人はバトルステージへと召喚された。

ってー！つつぺる工事現場。

一分ごとに床が崩壊する特殊なステージ。ソーンの初バトルがこのステージとは運が悪いのか、否か。

紅チームとしてスタート地点に降り立ったソーンが隣を見ると、そこには金髪の青年が気怠げに立っていた。彼は味方を見て「リリカちゃんがない」と大袈裟に嘆いていたが、蒼チームにいる敵を見てテンションを爆上げさせていた。

お互いの準備が整い、二チームの啖呵がきられる。紅チームの先頭はメグメグ、蒼チームの先頭は眼鏡の少女だ。

「ガトリんで風穴開けてあげるね？」

「切ろう今すぐ切ろうどんどん切ろう全部切ろう」

バイオレンスな二人の言葉に、今回が初のバトルであるソーンの顔が引き攣る。しかし、隣にいるマルコスも、敵チームの彼等も平然とした顔をしているので、これが普通なのかと気を引き締め直す。

《紅チームの皆さん、準備はよろしいですか？ バトルの始まりです》

その言葉を皮切りに、敵味方問わず六人全員が動きだす。まずは自陣のEポータルへ。

「綺麗なものは壊したくなるよね♪」

《キーを獲得しました》

メグメグがポータルキーを取得し、床の崩壊が戻るまで三人で待機。

初心者といえど、ソーンはアダムからバトアリでの基本の立ち回り方を教わっているため、次はDポータルへ…と考えたところで思考が切れた。

床の修復が終わった瞬間、メグメグがCポータルに向かって駆け出したからだ。

「……!? メグメグさん!?!」

「きゃはははははっ！」

楽しげな笑い声を上げ、メグメグはCポータルに「どこにでもいけるドア」で転移してきた旗持ち少女ジャンヌ・ダルクに向かってガトリンを連射する。

ジャンヌのロールは、タンク。体力が高いサポートタイプである。

「御旗を掲げよ！」

《キーを奪われました》

Cポータルを取得している最中のジャンヌにHAで攻撃し続けるメグメグ。想定とは違うバトルの進み具合に戸惑ったものの、自陣2つのポータルは取得しておくべきだと、ソーンはDポータルへ向かう。

その間、ジャンヌの体力を半分まで削っていたメグメグだったが、敵チームから援軍がやってきた。防御カード【全天首都防壁Hum—Sphere—LLIK】と強化カード【ドリーム☆ミーティア】を使い、乃保がメグメグに突撃する。

「砂糖より甘いんだねー！」

乃保が突撃してくるのを見るやいなや、メグメグはHAを中断、ガードブレイク【蒼王宮—終焉禁獣 グラナート】で彼女を吹き飛ばした。

すかさずジャンヌが乃保を回復させるためにHAを使うが、陣どつた位置が悪かった。

「触れたきやお菓子を持ってきな！」

「くっ、つうっ……！」

「これ……ひい……！」

倒れた乃保に向かって放たれた【迅雷の科学者 アバカン】に巻き込まれたジャンヌがスタンにかかる。二人まとめてHAで撃破した。

「バラバラにバイバイ！」

「あたし悪くないどうして殺すの」

《連続で敵を倒しました》

「え……」

Dポータルを取得し終え、メグメグの援護に向かおうとしたソーンは思わず足を止める。ガンナーたった一人でアタッカーとタンクの

コンビを撃破するとは思わなかったのだ。困惑のまま、新しく敵が来ない事を確認してポータル領域を拡張する。

メグメグはCポータルを奪い、その場で待機……と思いきや敵陣へ向かっていった。

「!?」

「んじや俺らも行くっかー」

「えっ!? Cポータルを守った方がいいのでは……」

「普通はねー。でもほら、メグメグ突撃しちゃったし。一人で突っ込んだら即溶けしちゃうし……何よりあっちにはリリカちゃんがいるからね! 待っててリリカちゃん今行くよ!!」

「ま、待ってくださいー!」

いきなりテンションを上げて爆走するマルコスに続き、ソーンも慌てて後を追いかける。敵陣のBポータルでリリカと激戦を繰り広げていたメグメグの背後から枝を構えるマルコス。

(……!? 枝!?)

アダムから武器についてのレクチャーを受けていないソーンは、アタッカーなのにもな武器に呆然とする。

しかし流石は騎士団長の弟。すぐに我を取り戻し、強化カード【ひめたる力の覚醒】を使い攻撃を開始する。

「それっ!」

「きゃっ!」

HAでリリカのすぐそばにワープするマルコス。そのまま攻撃を加え、枝の威力の高さにソーンは再度驚く。その一瞬の間に、リスポーン地点から復活した乃保が滑り込む。

「顧みる返り血最高……!」

「のーっ!」

連続カード【ライバル凶刃忍者―幽々院ゆらら―】により、ミリ単位で残された体力ゲージ。追撃しようとする乃保に、ソーンが咄嗟に切ったカードでメグメグは何とか事なきを得た。

「ヴェテロク・ツァーリ!」

「痛っ」

(危なかった……オルレンを使っただけでよかった)

「アウローラ、スウィーニー！」

《敵を倒しました》

「大丈夫ですか、メグメグさん！」

ソーンが後ろを振り向いてメグメグを見ると、立ち上がった彼女は回復カードを切る様子もなく。

「50口径に耐えられる？」

「あ、あいつ、回復を……！」

《味方が倒されてしまいました》

「え？ ……マルコスさんっ!？」

慌てて前を向くと、マルコスはそこに居らず、崩壊を始めた床と共に下へ落ちていた。視界の端に桃色が見え、自陣Aポータルへ向かうリリカが遠のいていく。

ソーンも慌ててCポータル付近の安全なエリアへ向おうとするものの、

「待って待って〜！」

「まっ……追いかけないで引いてください！」

追撃しようとするメグメグを引き留めようとして、崩壊する床と、道連れの状態になったメグメグと共に、ソーンは落下した。

「兄様……ダメ、でした……！」

「次は手榴弾でバレーしようね♪」

「魔導書よ、もう一度僕に力を！」

「次は何の銃器を使うかな？」

リスポーン地点に復活した二人は、Cポータルに向かって駆け出した。その少し前には数秒前に復活したマルコスが走っている。

ちらりとソーンがメグメグの顔を見ると、不満の色はなく、ギラギラと瞳を輝かせていた。わざとではないとはいえ、道連れでデスさせてしまったため不安だったのだが、心配は必要なかったらしい。

《キーを奪われました》

全員がリスポーン地点にいたため、Cポータルが奪われた。

階段を駆け下り、三対三の激戦が始まる。前線ではマルコスと乃保のタイマンが繰り広げられるが、ジャンヌの回復があるため、マルコスが不利だ。その上、遠距離からリリカの攻撃も一身に受けている。

「なんだか僕、わくわくするぞー」

「……あと一撃だったのに、どうして斬られてくれないの？」

「リリカちゃんの前でキルられたくないからね」

三段回目の覚醒を終え、体力が全回復したマルコスがジャンヌの回復を少し上回る勢いで乃保へ攻撃を加える。が、リリカの攻撃も侮れない。徐々に体力を削られるマルコスだが、レッド紅チームにもガンナーは二人はいる。

「術式、展開……リオート・メーチ！」

「ガトリン発射発射！」

《敵を倒しました》

氷柱に打ち上げられた乃保がメグメグによって倒される。残った敵はリリカとジャンヌ。リリカにはマルコスが、ジャンヌにはソーンとメグメグが猛攻を加える。

「きやつ、痛いっ！」

「ごめんねー！」

「魔法が……解けちゃう……」

《敵を倒しました》

「ぐちゃぐちゃになれー！」

「ぐうっ、この程度……」

「加減出来ませんよ！」

《敵を倒しました》

マルコスは通常攻撃で、ソーンは【狂愛の次女 ヴァルヴァラ】によって敵を撃破した。ほっと安堵の息を吐いてポータルを奪おうとする。

「あー、駄目だね」

「え？」

「床の崩壊始まつちやったから取れないや。時間かけすぎちやったねー」

「次に床が出来た時とればいいーよ♥」

機嫌良さげにメグメグがCポータルの安全地帯に走る。その後マルコスとメグメグが続き、

「あれ？　メグメグ回復しないの？」

「メグメグ回復積んでないよ？」

「嘘でしょ……」

体力が半分ほど削れていたメグメグの発言にマルコスは溜息を吐き、ソーンは絶句した。しよーがないか、と呟いてマルコスはそのまま気にしていないようだが、ソーンからすれば信じられない。

ジャンヌのような自分で回復できるのならともかく、そうでないなら最低一枚は回復を積んでしかるべきである。

それなのに、回復を積んでいない？

頭が痛い。

「床出来たらメグメグが取つといてー。僕とソーンで敵を引きつけとくからさ」

「は、はい。分かりました」

「ええ？　メグメグもやりたくい」

「ダメー」

「むう。しよーがないなー」

頬を膨らませて、不満を表しつつも了承したメグメグに、ソーンは彼女の思考回路が分からなくなる。戦いを望むなんて、ソーンからすれば理解できないのだ。

複雑な気持ちで渦巻く中、床が修復され敵チームがやってくる。

「んんっ、……やーっ！」

「痛い……」

【ドリーム☆ミーティア】でいち早くCポータルへ辿り着こうとした乃保がマルコスによって抑えられる。彼女の背後からはリリカが飛んで向かってくる。リリカに目を奪われたマルコスが乃保の「オンエア部下忍者ーアニマルチューバーズー」で溶かされた。

「KILLの最高……」

「僕としたことが……」

《味方が倒されてしまいました》

《キーを獲得しました》

「もつともつとちようだいちようだ〜い!」

キー獲得したメグメグをターゲットにしたのか、乃保がメグメグに向かって走り出す。慌ててソーンが「狂愛の次女 ヴァルヴァラ」を発動する。

しかし、それを読んでいたのか乃保はそれを避け、メグメグに突っ込んでいく。

「く……貫け!」

「えいつ! やっ!」

「ううっ」

乃保の注意を自分にむけようとするも、リリカから攻撃を受けてそちらに対処せざるをえなくなる。心配そうな視線を一瞬だけメグメグへ向け、ソーンはリリカを相手に集中する。

「それ、氷よ、スウィーニー」

「きゅぴーん! 強くなるんだから! えーい、そーれ!」

「そんな!」

お互いにどちらが先に体力がつかるか……という展開になると思いきや、リリカは防御カード【究極系ノーガード戦法】強化カード【創霊の加護 タイオワ】を使い、ソーンは一気に不利になった。

「タイオワ〜!? リリカの怪物ゴリラ!」

「ご、ゴリラじゃないもん!」

乃保と戦いながら、ソーンとの戦いも見ていたのか、メグメグが叫んだ。その叫びは、それなりに気にしていたのかリリカを涙目にさせた。

その間にジャンヌがリリカの側に到着し、HAで回復を始める。

「あ……くっ、このままじゃ……!」

「もー、ノホノホ邪魔ツ!! つらぬいちゃえ!」

メグメグがすぐそばまで来ていた乃保に向かって【機船師団 フ

ルーク・ツオイク」のカードを切る。

「溶ける……」

「悪い子はお仕置きされちゃうんだよ?」

《敵を倒しました》

乃保を倒したことで、メグメグが加勢にくる。しかし、そこでジャンヌがHAを中断し、【電撃ロボ Eledoll-115】を発動した。

「下がりなさい!」

「ああ、クラクラするう……」

「あれー、体が動かないよ?」

スタンにかかり、回復も出来なくなったソーンはリリカの攻撃で溶ける。

「寒くて、なんだか眠いです……」

「ごめんねっ!」

《味方が倒されてしまいました》

そして、Cポータルエリアでスタンにかかっているメグメグにもリカの凶弾が迫る。体力がミリ単位になったその時、攻撃の隙間にメグメグはHSを発動させた。

「投下開始! こっちこっちー、きゃはっ、奥の手出しちゃうぞー?」

「えいつ、やつ!」

「たあっ、せいっ!」

「しっかり顔、覚えたからね♪」

《味方が倒されてしまいました》

《バトルが終わりました》

《勝利です》

「いえーい! メグメグの勝ち♪」

「何とか勝てました……」

「楽しかったー！ またやろうね！」

バトルアリーナに戻ってきたメグメグとソーンは、対象的な反応を見せた。

機嫌良さげにを笑顔を見せるメグメグと、たった三分といえどバトルに相当の神経を使ったソーン。まるで似ていない二人である。

「……あの、どうして回復を積んでないんですか？」

「だって、その方がいっぱいキル出来るよ？」

「？」

「??」

お互いがお互いに疑問符を浮かべる。どうしてそんな事を聞くんだろう、どうしてそんな理論になるのだろう。お互いに理解しあえていなかった。

「そんなことよりさ！ もっかいバトルいこーよ！」

「それは構いませんが、回復をせめて一枚……」

「行つくよー！」

「!? ま、待っ……！」

「きやはははは！ ぐちやぐちやになれー！」

「メグメグさんっ！ ポータル奪ってちゃんと回復して下さいツ!!」

「ねんねの時間だぜベイビー！」

「一人で前線に突っ込まないで、ちゃんと味方を待っててください！」

「ガトリンが急におも〜い……」

「弱体化が切れるまで前線から下がってください！」

「疲れました……」

「ソーンと固定組んでるとすごい楽〜!」

ぐったりした様子で椅子に座り込むソーン。数え切れないくらいの連戦をこなし、初心者とは思えない活躍をした彼でも、流石にキツイらしい。

そんな彼の前では、同じだけの連戦をこなしたにも関わらず元気にはしゃぐメグメグが。この連戦で、ソーンとの相性が相当良い事に気づいたのだ。

「ねーねー、これからもメグメグと固定組も? いーでしょ? ねー?」

「え? いえ、それは……」

上機嫌で提案してきたメグメグに、ソーンは困ったような顔を見せる。前々から、アダムにバトルに行く時は一緒に行きたいと常々言っていたからだ。

それなのに、メグメグと組んでしまったら兄に見せる顔がない。

「あー! もしかして誰かともう組んでる? だれえ?」

「え、と……兄様です。前から一緒に行きたいと僕が我侬を言っている」

「そういうえばアビリティもダムダムと一緒だとHS溜まるんだっけ?」

じゃあさじやあさ、メグメグとダムダムと三人で固定しよー! それならいーよね?」

「そ、そうですね? それなら……はい、大丈夫です」

「やったー! これからよろしくね!」

固定組みが確定してテンションが上がったのか、メグメグがソーンに抱きついた。

「……。……!?! あ、あの!?!」

「なにー?」

ぶわっと顔から湯気を出したソーンに気付いていないメグメグは上機嫌のまま尋ねた。視線を泳がせ、しばらくパクパクと口を開閉し

ていたソーンは、やつとことで声を上げた。かなり上擦ってはいたが。

「じよ、女性が恋人でもない異性に抱きついたり、するのは……いかなものかと……思うのですが……あ、あの、恥ずかしいので離れてくれませんか……？」

きよとんとしたメグメグが、耳や首まで赤く染めたソーンを見て、悪戯な笑みを浮かべた。

「欸ー、こんなの軽いスキンシップだよ？ ほーら、ぎゅーっ！」  
「!?!?!?!」

「メグメグ殿、一体誰がソーンをこんな目に!? 少し報復にいつてくるので、名前と特徴を教えてくださいますか?」

「えつとねー、メグメグがハグしたらそうなっちゃったー☆」

「……………。あの、メグメグ殿。弟はあまり異性に耐性がないので、もう少し手加減をして頂けると嬉しいのですが」

「だって面白かったんだもーん」

「おーい、ソーン起きてー。アダムの弟くーん」

「あ、あう……」

「駄目だね、起きないや」

「リリカに抱きつかれたマルコスみたいだな」

「えつ嘘、僕そんなやばい顔になってる!? リリカちゃんに引かれるレベルじゃないよね!」

「引けないとこまでいってるから大丈夫じゃね? そんなことよりゲームしようぜ」

「そんなことじゃないよ! 大事なことだよ!!」

「俺とゲームで対戦して勝ったら、リリカにマルコスのことどう思っ  
てるか聞いてや…」  
「早くやろう」

## ソーンが13に弄ばれてる時の話

とある日の、シエアハウス。

そこでは、真っ白な髪に黄金色の瞳を持つ少年——ソーンユーリエフの歓迎会が開かれていた。

突発的な歓迎会故に、各々、用事があつたり都合が合わなかったりなどの欠席者が多かった。しかしそれでも、歓迎会を開催できる人数は集まった。主に兄であるアダムユーリエフの働きかけで。

結果、シエアハウスの管理者であるボイドール。

住人である、マルコス。リリカ。ジャンヌ。アタリ。マリア。メグ。サーティーン。

そして、兄であるアダム。

最後に本日の主役であるソーンの、総勢十名による歓迎会が開かれたのだった。

「このような会を開いて下さるなんて……皆さん、とても優しい方々ですね、兄様！」

「ええ、本当に。……若干一名、余計なのが混ざっていますが」

嬉しそうにはにかむソーンに、柔らかな表情を見せる一方で、アダムはゴミを見る目で視界の端にいた女性を一瞥した。

彼女の名は、マリアⅡSⅡレオンブルク。アダムと犬猿の仲であり、何かとガンを飛ばし合っている。おかげで幼子であるコクリコツト ブランシユや、善人のジャンヌなどは喧嘩の最中では肩身の狭い思いをしていた。個人主義のマイペースな奴等は気にせず自分の好きな事をしているからだ。

「あら、何か言ったかしら？」

「幻聴ですか？ 耄碌しましたね。そろそろ巣にお帰りになつては？」

「言ってくれるわね、この……」

「あー、あーっ！ ったく、今日は新入りの歓迎会だろ？ こんな時まで喧嘩すんなよ」

何時ものように始まりかけた喧嘩が、仲介の声で消滅する。この

シエアハウスにいる数少ない常識人、十文字アタリだ。彼はシエアハウスの管理人であるボイドールの友人であり、住人最古参の一人。彼の発言力はかなり大きいのだ。

彼の声掛けもあり、喧嘩は治まる。普段も彼等の喧嘩は彼によって治められる……が、彼がいない場合は、管理人によつて強制的に終わらせられる。

「今夜ハ歓迎会デス。バトルアリーナ以外デノ戦闘ハ禁止デスヨ。次喧嘩ヲシタラ今後《謎の死》ガ多クナルカモシレマセンネ」

このように。

ボイドールは、シエアハウスのみならずバトルアリーナの管理人でもあるのだ。バグである《謎の死》を故意に起こされてはたまらない。脅しに似たセリフと共に、アダムとマリアの喧嘩は治められるのだ。

「ボイドールも脅すのはそれくらいにな。そろそろ歓迎会を始めようぜ。ほら、新しい住人、ソーンの入居をいわつて！ 乾杯！」

「かんぱーい！」

「か、乾杯！」

アタリの言葉で、喧嘩なんてまるで気にせず、料理をガン見していたメグメグがノリノリでジュースが並々と注がれたコップを持ち上げた。それにリリカやマルコスといった面々も続き、少し遅れてソーンもコップを持ち上げた。

ガラスのコップ故に、かんつと小気味よい音が鳴る。

わいわいと好きな料理を小皿に取り、近くの者と歓談しつつ平らげていく。

主役のソーンは、アダムの隣で少し緊張しながらも、徐々に周りと打ち解けていった。

「さっちゃん、ほれふおつてー」

「飲み込んでから話せよ。どれだ？」

「ん……唐揚げ！」

「野菜食え。ほーら栄養たつぷりだ」

「メグメグ緑のヤツきらしい」

「リリカちゃん、何が欲しい?」

「えっとね、あそこのマカロニサラダが欲しいな」

「オツケー! はい、どうぞ」

「ありがとうマルコスくんっ!」

「美味しいですね。これは誰が作ったのですか?」

「まといサントマリアサンデスヨ。まといサンハ夜カラ用事ガアルヨ  
ウデ参加シテイマセンガ」

「盛り付けが絶妙に上手かったわね。特にあそこの刺し身の盛り付け  
は素晴らしいわ」

「そうなんですか! 皆さんやはりお上手ですね。ですが二人でこの  
量は大変だったのでは? 次からは私もお手伝いしま……」

「絶対にやめて」

など、各々が好きに交流しあっている。賑やかな歓迎会は続き、料  
理も無くなってきた。それぞれが満足そうにお腹を擦ったり、眠たげ  
に船を漕ぎ出したりし始めた時、それは起こった。

食事後の穏やかな時間。それを切り裂くように、その言葉はリビン  
グループに響き渡った。

「ハビーと呼ばせてください」

その言葉の前後は聞き取れなかったが、その言葉だけは全員の耳に  
届いた。驚愕の表情を浮かべる者、面白そうに笑う者、困惑を隠せな  
い者、不思議そうに首を傾げる者。

様々な反応を招いたその発言の主は、件の少年。歓迎会の主役であ  
る、ソーン本人に他ならなかった。

そして、その言葉が向けられたのは一人の少女。キュートな見た目  
とは裏腹にデンジャラスなガトリング娘、メグメグだった。

「? ?? メグメグのハビーになるってこと?」

「はい!」

「待つて。色々待つて。え? 整理するから待つて!」

きよとんとした顔で、少し期待に輝く瞳を見せて、思考の余地なく

了承しそうなメグメグに、アタリが慌てて横槍をいれた。

無論、混乱しているのは彼だけではない。ジャンヌやリリカもある。だが、一番混乱しているのは兄であるアダムだった。無理もない。彼はフリーズして意識を飛ばしていた。

「待て待て待て……。よし、ソーン。今の言葉は本気なのか？」

「は、はい。本気です。これから一緒にするとなれば、やはりコンパス流の決意表明をしておくべきだと思ったので……」

「コンパス流かどうかは知らないけど、うん。そうか……。本気なんだな」

キリリとした顔で、アタリの目を見つめて言い切ったソーンを目の当たりにしたアダムは、血の涙を流した。隣にいたマリアがドン引きの表情を見せる。

幸か不幸か、それにアダムが気付くことはなかった。

その一連の流れを目撃したりリリカは興奮気味に隣にいたマルコス  
の袖を引っ張った。

「ね、ねえ、すごいよマルコスくん。リリカ、今すぐ恋愛っぽいやり取りを目の当たりにしてるよ！」

「そうだねリリカちゃん。なんか全然噛み合ってなさそうだけど、リリカちゃんが楽しそうだからいつか！」

「？ 何か言った？」

「ううん、何でもないよ」

期待の眼差しでメグメグとソーンのやり取りを見守るリリカと、そんなリリカを鼻血を抑えながら見るマルコス。自分の中の世界で楽しそうに生きていた。

一方ジャンヌも、ハラハラしつつ自由恋愛を推奨しているので少女漫画を見るような気持ちで彼らのやり取りを見つめている。

そんな中、誰とも違う反応を示している者が二人いた。

（人間ハ無駄が好き。知ツテイマス）

機械目線で二人の恋愛を観察する管理人、ボイドール。そして、

「……………ッ！」

口元をびくびくと震わせ、何なら全身を震わせる黒衣の人物。ひっ

ひっと息も乱れており、心なしか瞳も潤んでいる。まるで失恋に打ち震えているかのようだが、実際はただ笑いを堪えているだけだった。

彼の名は、13?サーティーン?。

メグメグがコンパスの中で最も親しい異性である。ちなみに同性ではリリカだ。

サーティーンは、この状況を心底楽しんでいた。

「メグメグさん。ハビーと呼んでもいいですか?」

「ん〜……ダメかなあ」

「!? え、で、ですが、さつき……」

「さつき? メグメグ何か言ったつけ?」

首を傾げるメグメグに、ソーンが慌てた様子で言った。

「固定を組もうって言ってましたよね!」

「? それが何でハビー呼びに繋がるの〜?」

「え?」

「うん?」

きよとん。

お互いが目を丸くして見つめ合う。数秒後、ソーンの視線がサーティーンに向かう。つられて、その場の全員がサーティーンへと視線を向けた。

そこには、全身を震わせてテーブルに突っ伏すサーティーンの姿。微かに喉から引き攣ったような音が漏れている。

「サーティーンさん……まさか……」

そこで、ジャンヌが何かに気づいたのか、責めるような目でサーティーンを見た。それが起点となり、皆がなんとなく察しがついたのか、呆れ気味の目を彼に向けた。

「サーティーン。お前、ソーンに変な事吹き込んだろ」

「おいおい、変な事なんて……ぶふっ! 僕ちゃん吹き込んでなんかないぜ?」

「嘘つけ」

笑いを我慢しつつ返答するサーティーンだったが、肩が震えているのは誤魔化せていない上に、声が上擦っていて隠す気がまるで感じら

れない。

それをしつかり感じ取ったアタリが呆れ果てたように言った。それによって隠す気はゼロになったのか、サーティーンは机に再度突っ伏した。

「だ、大草原不可避www」

「お前……」

ひいひい言いながら呼吸困難に陥るサーティーンに溜息を吐きつつ、アタリはショックを受けている本日の主役を見やる。

ソーンは呆然とした顔で硬直していた。人と深く関わってこなかった弊害で、騙されるといふ行為に酷い衝撃に襲われているらしい。

「と、ということは、ソーン。ハビーの意味は分かっていたんだな？」

「え？ あ、えっと、男女が固定を組む場合に呼び合うものだ……聞いたのですが……」

安堵の表情で弟に問うアダムだったが、ソーンの言葉を聞いて再び能面になる。その言い方ではまるで自分が除け者にされている気分になってしまう。若干どころか最高潮に機嫌が悪くなった。

そんなアダムを見て、ソーンがまた何かやらかしたのだろうかと不安そうな顔を見せ、

「兄様、僕は何を間違えたんでしょうか……?」

「間違えたというか……」

慌てて表情を取り繕うが、質問の答えには上手い回答が見つからない。視線を彷徨わせ、同性であるアタリとマルコスに助けを求めた。

視線で助けを請われたアタリは、良心の下に行動しようと口を開きかけたが、マルコスに阻止された。訝しげにマルコスを見やると、彼はにっこりと笑顔を見せた。

「あのさあ、ソーン。ハビーってのは、彼女が彼氏を呼ぶ時の愛称みたいなものなんだよねー。つまり、恋人同士にだけ許された呼び方ってこと……ね、アタリ」

「おう、合ってるけど……。もうちょいオブラートにしてやれよ、ソ-

ンがフリーズしただろ」

恋人：恋人：と呟き、顔から火が出そうなほど顔を真っ赤にしたソーンが頭から湯気を出して目を回した。ここにきてようやく自分が何をやらかしたのか悟ったらしい。

「おいメグメグ、当事者なんだしちよつとフォローいれてや……」

「ふあ？ らにー？」

「この騒動を無視して飯食うなっ！ ソーンが可哀想だろって、ジャンヌまで何してんだ!？」

「も、申し訳ありません。ですが、こう、私の目の前にあるご飯を食べたそうに、捨て犬のような目で見られてしまうと……つい……」

もしやもしかやと口いっばいに頬張っていたメグメグが他人事としてスルーしていたのか、？マークを頭上に浮かばせながらアタリを見た。

責められたジャンヌはウロウロと視線を彷徨わせつつ言い訳し、そつと目を逸らす。何となく後ろめたい気持ちはあったのだ。

けれど、自分の目の前の料理を物欲しそうに、うるつとした瞳で見上げられ、うっかり料理を皿に取ってあげてしまった。その事實は覆らない。

「あー、ジャンヌはいい。だがメグメグ、お前は駄目だ」

「えー、何が駄目なの？」

「おい当事者。自覚しろ自覚」

天を仰ぐアタリと、本気で何なのか分かっていないメグメグ。この反応で、いかにメグメグが他人の心を理解できていないか分かるだろう。まあ、生い立ちをかんがえれば仕方無いのだが……時と場合を弁えろと、アタリは言いたかった。言いたかったがぐつと我慢した。

常識を教え込むよりも、先に対処しなければいけない事があるからである。他の奴等も見てないで手伝えと思った。口には出さなかったが。

「あー……ソーン。ほら、間違いつて誰にでもあるし、あんまり気にすんなよ。悪いのは誰かっていうと間違はなくサーティーンだしな」

「う。は……はい、すみませんでした。メグメグさんも、さっきのことは

忘れて下さい……」

「? わかったー」

結局、今回の件はアタリのフォロワーの下、それなりに丸く収まった。……一部の例外を除いては。

「なーんだ、恋愛じゃなかったんだあ……。ソーン君には悪いけど、ちよつと残念かも」

「リリカちゃん、それならこの恋愛アニメとか見ない? 結構楽しめるよー」

目の前の恋愛劇場を楽しんでいたリリカだけは、少し物足りなさそうな顔をしていたものの、歓迎会はこれ以上の事件もなく、つつがなく終了した。

後日。

何だかんだいいつつ、事件というものは、やはり当事者が一番引き摺るもの。

自分の知識不足であんな失態を犯してしまったソーンは、落ち込み気味にソファの前で座り込んでいた。

あんな事があったとはいえ、時間は流れバトルアリーナには当然向かう。アダム、ソーン、メグメグの三固定で挑むのだが、勿論のこと気まずい。ミスを連発してしまったりして、彼は項垂れていた。無論アダムのフォローで事なき得たのだが、やはり落ち込むのは必然だった。

「兄様にも、メグメグさんにも、迷惑をかけてしまいました……」

自分の不甲斐なさに、ため息が出る。

兄に頼み込んで、ようやくこのシェアハウスへ入れてもらってバトルアリーナにも行けるようになったのに、この体たらく。

失望されているのではないか、と不安になるのは当たり前だ。

もう一度ため息が出そうになった時、頬に冷たい何かが当たった。

「うわあっ!？」

「あはっ★ 良い反応するね！」

「め、メグメグさん!？」

肩を跳ね上がらせたソーンの背中から、楽しそうな声が聞こえる。ソファの向こう側から、青いカップを持ったメグメグがソファを乗り越えてくる。

にやにやと楽しそうな笑みを浮かべた彼女は無造作にそのカップの蓋を開けると、木のスプーンで中の白い塊を掬い、ソーンの口の中に突っ込んだ。

「!？」

「美味しー?。」

訳がわからないまま、とりあえずはそれを味わう。食べたことのないものだったが、不味くはない。むしろ美味しい。

ソーンはこくりと頷いて、それを見て機嫌良さげな顔をするメグメグに首を傾げた。

一体何なのだろうか、と。

初日でメグメグの行動原理はまるで理解出来ないものだとなんか察したものの、今回は殊更良くわからない。

「美味しいもの食べたら元気が出るよね♪」

「あ……」

そこで、ようやく理解した。

メグメグは、わざわざ自分を慰めようとしてくれたのだ、と。

昨日はあんな事があったのに、きつと気分を害していただろうに。今日だってあんなにミスをしてしまったのに。

じわりと、胸の中に何かが広がる。嬉しいのかもしれない。こうやって、自分を案じてくれる人がいる事が。今までは、兄しかいなかったから。

「……ありがとうございます」

差し出されたスプーンに乗ったそれは、とても甘くて、優しい味でした。

勿論、メグメグは特に何も考えていない。

## ゾーンとメグメグと兵長がバトルする話

「本日ヨリ一定期間コノシエアハウスデ生活スル事ニナツタ『リヴァイ』サンデス」

「よろしく頼む」

ゾーンが来てから二ヶ月経った頃、コラボヒーローがやって来た。進撃の巨人における人類最強である。通称は兵長。親しみを込めて兵長と呼ぶのが良いだろう。

そんな彼をパチパチと拍手して歓迎するのはシエアハウスの住人達。面白そうに見つめたり、純粹に歓迎したり、キルとどうなるんだろうかと考えたりしている。

「ねーねー、ロールは？」

「アタツカーデス。連続攻撃ガ優秀デスヨ。乃保サントタイプデスネ」

「神よ、タンクに慈悲を……!!」

双挽乃保による蹂躪を思い出したジャンヌが泣き崩れ、タンク組が悲しげな顔で彼女の肩を叩く。

防御力無視——貫通カードの中でも連続だけ優秀過ぎて泣いた。貫通ダメとか普通に死ぬ。しかも二枚積みとか鬼では？

当の本人である乃保は不思議そうに首を傾げていた。彼女の本質はシリアルキラーみたいなので、気にしてはいけない。

「リヴァイサンハHAモ今マデニ無イ仕様デス。戦略ノ幅ガ広ガリマスヨ」

「おや、そうなのですか。どのような効果が？」

「立体起動装置で飛ぶ。巨人がいらないこの世界には無いらしいな。……珍しい世界もあるもんだ」

「立体起動装置?？」

それぞれが理解不能という表情を浮かべ、ボイドールがヒーロー紹介ムービーを流し始めた。

真剣に見ていたジャンヌが神に祈りを捧げ始めた。HAによるダウンからの連続攻撃からは逃れられない運命なのだ。

かなり強力なヒーローの登場に、シエアハウスの住人達は殺気立

つ。彼等は大体バトルジャンキーなのだ。

アタッカー組が新入りに負けてられないとばかりに立ち上がり、颯爽とバトルアリーナへと駆け出した。負けず嫌いばかりである。

「オット、言イ忘れル所デシタ。リヴアイサンの期間限定入居ト同時二新ステージを追加シマシタ。ステージモ期間限定デスノデ、楽シンデ下サイネ」

「おつ、マジで？ だったら俺も行かなきゃな！」

ボイドールの言葉で嬉しそうに目を輝かせたアタリが出て行った。流星はスプリンターというべきか、あつという間にアタッカー組を追い越して行く。

残ったスプリンター組、ガンナー組、タンク組はそれぞれ顔を見合わせる。

「おい、どーするよ？ 行くかあ？」

「あーしはパス。これから生放送の時間だし？」

「私も……今回は止めておきます。皆さんに神の御加護がありますように」

13が問えば、きららとジャンヌが断りを入れる。きららは仕事で、ジャンヌは精神的ダメージが大きかったためだ。

「コクリコ、あのステージのおつきい人こわい……」

「なら止めておきなさい。今回は私もやめておきますわ」

涙目でふるふる震えながらティールビィを抱き締めるコクリコの頭を撫で、ヴィオレッタも参戦拒否。

ならば……と13はジャステイスとグスタフへと視線を移す。

「女タンクはパスか。じゃ、オツサンらはどーすんだい？」

「俺の背中に……と言いたいところだが、止めておこう。まだあの時の傷が癒えていなくてな……」

顔を悪くしたジャステイスに、それに同意するように頷くグスタフ。

どうやらタンク組はあの思い出すのも恐ろしい悪夢のトラウマを克服出来ていないらしかった。まあそれもしゃあないか、と周りの人間は頷く。

あの頃のタンクの即溶ぶりはやばかった。

「じゃ、スプ組は？ きららとコクリコはりタイヤしたけどよ、お前らはパスする？」

「えー行くに決まってるじゃん！ 新ステージなんて見たところ、なかなか悪戯が捗りそうでしょ？」

「悪戯……罨……テスラ……うっ、頭が」

キラキラした瞳で告げたテスラを見て、何人かが頭痛を訴えだした。ちなみに彼等の共通点はテスラの悪戯に巻き込まれたり被害者だったりする。

流石にやつちやいけない人にはやらないだろうが、テスラの悪戯には誰もが頭を悩ませている。

「んろちも、よくい！ ねだみしのた！」

「何言ってるの全然わかんねえけど、行くって事でいいな？」

ぶんぶんと顔を縦に振る勇者。合っているらしい。アタリやマルコスなら即座に理解出来るのだが、生憎彼等はバトルアリーナに既に向かってしまっていた。

そのため、勇者と会話するには時間を必要とする。

「最後にガンナー組だが……リリカとメグメグは確定として、他に誰か行くか？」

「あつ、僕も行きます。新ステージなんて初めてですから」

どこかワクワクした顔でソーンが言うと、メグメグが満面の笑みを浮かべた。そっとソーンの太ももに伸ばされていたメグメグの手が引っ込んでいく。

恐らく本人が志願しなければメグメグに誘われて（脅され）ていただろう。手段はかわいいものだが。

「あたいは今、花火の注文が沢山あってね……行けそうにないよ」

「夏までに作らないといけないんだもんね。しようがないよ」

「悪いねリリカ。出来るだけ早く終わらせるよ」

しょんぼりした顔のリリカに苦笑して、まといは気合いを入れて部屋に戻った。これから夏までに花火を作りあげるのだ。

残りのガンナーは、ルチアーノとイスタカだ。

「私は行こう。毎日戦っておかねば腕が鈍る。マピヤを暇させる訳にもいかないのではな」

「ほほう？　じゃ、オッサンガンナーは出撃だな」

「勝手に決めるな。私は腰の調子が悪いんだ。悪いが今回は遠慮させて貰う」

「や、オッサンは俺と組むから」

「だから勝手に決めるなと……！」

結局、彼等は今回の新ステージに出撃する事になった。

そしてそれぞれ固定組は固定メンバーと、フリーなら気ままに一人でバトルアリーナに向かい始めた。

そんな中で、メグメグとゾーンは並んでとことこと歩いている。

「新ステージさあ、面白いかなー？」

「戦ってみない事には分かりませんが、きっと何時もと違った気持ちで戦えるはずですよ」

「だーよねー！　何積んで行こっかな？」

「回復!!　回復は絶対に積んで下さい!!」

「わかってるってば！　もー、しつこーい！」

必死の形相でメグメグに何度も念押しをするゾーンだったが、本人には嫌がられていた。一度ならまだしも、何度も何度も言ってくるからだ。

ゾーンはそれでも心配なのだ。たまに回復を積んだかと思ったらRランクの回復だったり……キレなかったただけゾーンは褒められて良い。

バトルアリーナに着いて固定してマッチング。

数十秒待って、ステージへ移動する。そこは新ステージ「ストヘス区」急襲戦闘区域。

二人は紅<sup>レッド</sup>チームで、もう一人の仲間は……、

「えっ、兵長さん!?!」

「なんだ」

「あ、いえ、よろしくお願いします！」

「ああ」

メグメグ、ソーン、リヴァイの紅<sup>レッド</sup>チーム。

アタッカーがいるのは大変心強いが、いかんせん初対面である。しかもコミュニケーション能力があまり高くなさそう。

失礼な事を思いながら、ソーンは気を引き締める。何にせよ、新ステージ。

皆が思うように動けなくて当然なのだ。

「害虫はプチプチ潰さなきゃ♪」

「家族への別れは済ませたか？」

<sup>ブルー</sup>蒼チームにいるのは、ルチアーノ、13、桜華忠臣の三人だ。

どちらのチームもガンナー二人にアタッカーが一人。中々に良い戦いになるのでは……そう思ったところで気が付いた。

「何あれ？」

「巨人だ。が、偽物だな。ただのオブジェクトだろう、気にするな」

「う、動いているのですが……」

「この世界には動くオブジェクトはないのか？」

「あ！ ルンバ！ ルンバがあるよ！」

「ならそれだと思え」

「ええっ!? あれを、掃除機扱いですか!?!」

素っ頓狂な声を上げるソーンだが、二人は既に聞いていない。

メグメグはさっさとリスポーン地点から降りEポータルへ走り出し、リヴァイはDポータルへ飛んでいく。

ソーンはおろおろしつつ、とりあえずDポータルを取らずに敵二陣へ向かって行くリヴァイの援護に向かう。

「立体起動を見るのは初めてか？」

「はあっ！」

（ルチアーノさん、上手い……!）

「これ、メグメグのものだからね」

《キーを獲得しました》

「さあ、我を恐れよ！」

《キーを奪われました》

流石は初期ヒーロー。PSがかなり高い。HAを使い、上手くりヴァイのHAの範囲外へと抜け出したようだ。そこから追撃とばかりに【迅雷の科学者 アバカン】を放つあたり侮れない。

が、リヴァイだって簡単に当たらない。防御カード【帝皇機神 ケーニヒ・イエーガー】を発動させようと、

「くらいやがれ！」

「くそがつ！」

13のHAによってカードキャンセルされ、リヴァイはまともにアバカンを食らいスタンにかかってしまう。

たった一人でリヴァイを守りながら二人を牽制しなければいけなくなつたソーンは既に涙目である。

仕方が無いので、デス覚悟でソーンは【全天首都防壁 Hum—Sphere—LLIK】を張り、何とか耐えようとする。

そんな時、ルチアーノが巨人と接触して吹き飛ばされる。

「……………え？」

そう呟いたのは誰だろうか。

あまりの事態に呆然としてみると、スタンにかかっていたリヴァイも吹き飛ばす。慌ててその場から離れたソーンと13は、そこでようやく理解する。

ステージ真ん中で戦闘を繰り広げている巨人に接触すると吹き飛ばされる、と。

「めんつどくせえステージだなオイ！ あの片言ロボット正気か？」

「さつさと済ますぞ」

《キーを獲得しました》

「あつ」

吹き飛んだ先がちょうどDポータルだったリヴァイ。これにて2—1である。慌てて13が【全天首都防壁 Hum—Sphere—LLIK】を張ってBポータルを取る。

「俺って赤だっけ、青だっけ？」

《キーを奪われました》

「行くぞ！」

「え!? あ、はい！」

「削ぎ落とす！」

13に向かってHAを上手く当てたりヴァイだが、ガードを張っているためダウンせず逃げていく。しかし数秒でガードの効果切れ、そこにすかさずリヴァイが「ドリーム☆マジカルスクエア」をかける。

全行動速度が大ダウンした13に【学園の王者 生徒会執行部】で攻撃する。少しの体力を残してダウンした13に通常攻撃で攻撃し、撃破。

「そういうのってアリ!?!」

「躰が一番効くのは痛みだ」

《敵を倒しました》

さて、トリヴァイが周りを見渡す。

今までルチアーノによる妨害が来なかったため、不思議に思ったのだ。ソーンの援護も無かった。

一体何を……と思っていれば、耳がソーンの声を拾う。

「術式、展開……リオート・メーチ！ それ、氷よ」

「くっ」

「オドを集中する……氷柱よ、出でよ！」

「ぐふっ」

「スウィーニー！」

「馬鹿な……」

「兄様、褒めてくれるかなあ」

《敵を倒しました》

(なんだあれ)

遊んでるのか？ と思った。戦場で遊ぶんじゃねえと口から出そうになった。

しかし、何故か敵を倒している……何だ、あれ？

(見た目がどうあれ、使えるなら構わねえか)

「安心しろ、峰打ちだ」

「カミサマなんていないよ？」

《味方が倒されてしまいました》

舌打ちがリヴァイの口から漏れる。一陣での戦いは忠臣が勝利したらしい。まあ、アタッカーとガンナーの戦いだ。近距離戦になればガンナーは不利なのだから仕方ない。

ギラついた忠臣の目がリヴァイを捉える。ここで敵二陣のBポータル、あるいはCポータルを取ろうものなら、忠臣にキルされてしまうだろう。

ここは大人しく自陣を広げるが吉である。

リス地から戻ってきた13とルチアーンが、同じように陣地を広げる。が、お互いに牽制しあって戦況は膠着状態である。

既に一分が過ぎ、残り二分。

何とか隙を見てCを取り維持したいのだが、いかんせん……

((巨人が邪魔——!!))

引き攣った笑みでちらちらと巨人を見る13。

最初にルチアーンとリヴァイを吹き飛ばして以来、ずっとCポータル付近で取っ組み合いをして動かない。いい加減にしろ。邪魔！

というのがお互いの心の内である。

何だこの新ステージ、思いやりがない。頭おかしいんじゃないのか、と13は思った。

期間限定ステージなのが不幸中の幸いである。

「たかいたか〜い！」

「わっ……メグメグさん!？」

「あ、ソーンだ。もう、おみおみ 臣臣おみおみつてば近距離上手すぎ！メグメグやられっぱなしじゃん！」

「お前……対戦相手変われ。俺が向こうに——」

「輪切りにして盛り付けてやるよ」

ぐだぐだしている間に、13がHSを使い出した。すたつと着々した13が鎌を構え、

「そおい！」

「うああ！」

ちやつかり逃げていたリヴァイとメグメグはともかく、逃げ遅れたソーンはそのまま13の手に倒れる……かと思いきや、

「触れたきやお菓子を持つてきな！」

「ぐえあ！」

メグメグの「チーちゃんのウワキオシオキ狙撃」によつて追撃を阻止される。ダウンしていたソーンがその場を少し離れるも、大した距離を稼げないまま13が起き上がった。

キルされるのだけは防ごうと、ソーンは「全天首都防壁 Hummer Sphere—LLIK」を張る。

13はそのまま流れるように「オールレンジアタック」を使い、

「そら、イっちまいなあ！」

「お稽古とは、違いますね……」

《味方が倒されてしまいました》

ソーンがキルられる少し前、メグメグがチーちゃんを使うと同時に、ルチアーノも「紅薔薇の暗殺術 クルエルダー」を使っていた。

それは見事にリヴァイを引き寄せ、ダウンしたリヴァイに「迅雷の科学者 アバカン」でスタンをかける。直後に「全員集合！魔法少女リリカ☆ルルカ」でHSを奪い取る。

その頃にはソーンの死亡通知が鳴り響いていた。

ルチアーノが踊るように通常攻撃でリヴァイの体力を削り、スタンから立ち直ったリヴァイが「魂を司る聖天使 ガブリエル」を使おうとした、その時。

ルチアーノがカードキャンセルさせようとHAの構えを見せた直後に、緑の男が視界に映る。

その男——忠臣がリヴァイの背後に立つ。リヴァイはまだその男に気付いておらず、その一撃【機航師弾 フルーク・ツオイク】を受けてしまった。

「遠慮無く死ぬがいい！」

「ぐっ!? ……次は殺す」

「眠れ」

《味方が倒されてしまいました》

《敵を倒しました》

「何？ 13!!」

「跡形もないって最高だね♪」

メグメグは近距離モーションが終わった姿勢だった。その背後には「荒れ狂う天空王 ぶれいずどらごん」が。

「ガンナーに積むカードか!？」

「相変わらず奇天烈な娘よな」

呵々大笑する忠臣とは対照的に、ルチアーノは引き攣った笑みを浮かべるしかない。

しかし、これはこれで良い流れだとルチアーノは思う。メグメグは既にカードの二枚を切っており、残り二枚のうち一枚は回復カードだろう。

なら確実にキルをもぎ取り、Cポータルを取れるだろう。

「行くぞ、忠臣」

ルチアーノの言葉が出た時には既に忠臣は前に出ている。その後ろに続くようにルチアーノも駆け出し、そして忠臣が落ち着いて「楽団姫 デイバー」を張った。

ん？ と首を傾げたルチアーノは目の前に「紅薔薇の暗殺術 クルエルダー」を使ったメグメグを見つけた。

「きったねえ顔で近付くなー」

「がはっ！」

もろに引き寄せされ、ルチアーノはダウンする。忠臣はガードを張っているため普通に攻撃しようとして、目を剥いた。

メグメグが続いて発動させたカードは「ライバル狂刃忍者―幽々院 ゆららー」だったのだ。

「まっ」

「ねんねの時間だぜベイビーー！」

「慢心、したな……」

《敵を倒しました》

しかし忠臣までそう上手くはいかない。ディーバの効果時間中に近距離カードを切っていたのだ。

メグメグがHAに移行する直前に、忠臣は「反導砲 カノーネ・ファイエル」を放った。ノックバックでHAを中断させられるメグメグ。その隙に、忠臣は刀を構えた。

「ゆくぞ……死ね！」

「のー！」

リス地あたりまで吹き飛んでいくメグメグを見て、忠臣はCポータルを奪取する。既に残り時間は一分を切っている。

キルに固執し、ポータルを取らずに引き分けては目も当てられないのだ。

「ここを我が国の領土としよう」

《キーを奪われました》

陣地を拡張していると、そこにリヴァイが飛んでくる。さっと避けて、連続と近距離カードの応酬が繰り返られる。そこへ13とソーンが走ってくる。

「アニマ式秘術、準備出来ました！」

「やれ！」

「はい！ 魔導書チエーニ、第一拘束解除！ 目覚めよ、グラナート！」

リヴァイの相手を忠臣に任せ、13がソーンを狙い始める。何度もノックバックされては困る、リヴァイはメグメグに向かって大声を上げた。

「おい！ 何とかしろ！」

「テキトーじゃん！ もー、しょうがないなあ」

メグメグは13に向かって「チーちゃんノウワキオシオキ狙撃」をぶつ放す。クールタイムが終わっているのがそれだけだったのだが……遠距離だったの幸運だ。

13がダメージを食らった瞬間にソーンは忠臣に突っ込み凍らせて、13に向かって走って行く。

逃げる13、巨人に吹き飛ばされてちょうど氷の道の上に落下す

る。

「はあっ!？」

それをメグメグがH Aでキルし、忠臣もリヴァイが通常攻撃でキルする。

そのままリヴァイはH Aの構えを取り、ゾーンとメグメグがCポータルを奪取する。

遅れて走ってきたルチアーノをリヴァイがフルボッコにし、

「楽しいか？ 俺は今楽しいぞ」

「やつと会える……」

《敵を倒しました》

「少し冷えるのでご注意を！」

「綺麗なものは壊したくなるよね♪」

《キーを獲得しました》

ゾーンが時間を確認する。残り二十秒。

「これはもう勝ち確だよね！ アピする？」

「それは煽りになるんじゃないでしょうか……」

「いーのいーの！ だってメグメグの勝ちだもん」

「お前ら、戦場で気を抜くな」

完全に終わった気になっている二人は、油断しまくりで見えいられるものではなかった。

呆れ返ったりリヴァイが注意するのもおかしな事ではない。

「えー？ いいじゃん、へーちよーのケチー！」

「誰がケチだ、お前——」

「隙を見せたな！」

「へっ?」

「死を超えるからこそ死神」

【恒星間転送装置T e r e — P a s s】で飛んできたルチアーノがH Sを発動させる。驚いた顔で振り向く三人を、容赦なく3発の弾丸が貫いていく。

「死んだ妻すら、利用する男なのさ」

《味方が倒されてしまいました》

三人分のナタデココが周囲に撒かれる。それを気にせず、ルチアーノはポータルに触れ、

「私に任せろ」

《キーを奪われました》

〈味方ナイス！ 13〉

〈味方ナイス！ 桜華忠臣〉

《バトルが終わりました》

《負けちゃいましたね》

「私の姿を見た事、一生誇るが良い」

「なーんであそこでテレパスなの!? ルチルチいつもは回復積んでるのに!」

「博打だったが、上手いこと行ったようだな」

「はー!? 全っ然ダメダメだけど!? もう一回!!」

「残念だが、お互いメンバーがやる気ゼロだ」

## メグソン兄様固定が初期固定と出会う話

「BMが貯まりました」

「おおっ！ 60連？ 60連だよ、ソーン！」

「はい、60連です！ 進撃コラボの兄様とお揃いのコスチュームでバトアリに行ってみせます！」

「……………？ メグメグのコスは？ 何でメグメグのコラボコスなの？」

毎日コツコツ貯めてきたBMを、いざ消費！ 興奮気味のソーンには、メグメグの不満げな声は聞こえていなかった。

ガチャ部屋のコラボ限定ガチャを目前にして、すっかり周りが見えなくなっている。今回が初めてのコラボなので、かなり上がっているようだ。

「よ、よーし、引きます……………！ いや、もう少し後の方が……………？ でもようやく貯まったのに……………」

「まだ？ ねーねー、まだー？」

「やっぱり最終日あたりに……………」

「——おっそーい！！ もー、メグメグがやってあげるね？」  
「えっ」

ソーンの5000BMを掻っ攫い、メグメグは止める間もなくコラボガチャを回した。

その姿を呆然とした様子で眺めるソーンだったが、それも数秒。慌てて止めようとするが、時既に遅し。

「えっとね、えっとねえ。どれがいいかな？」

UR確定演出。

メグメグの暴挙を忘れ、ソーンは思わず瞳を輝かせる。ソーンはシエアハウスに来たばかりなので、まだURカードは一つも凸っていないのだ。

それに、コラボカードも優秀。特にソーンはURの【進撃の巨人】超大型巨人来襲が欲しかった。周囲サイレントは、防<sup>ダ</sup>カ<sup>メ</sup>カードを張っている時に非常に頼りになる効果なのだ。

そして、ガチャの結果。

「……………」

「だいじょーぶ？ アイス食べる？」

「大丈夫です……………」

爆死。

それは期待値が上がった状態で経験すると、とてつもない絶望が押し寄せるのである。

ガチャの結果、SRはコラボカード一枚と恒常カード四枚。そしてURは「ガルガルのピカピカデコ戦車」一枚である。

「……過ぎた事は気にしても仕方ありません。次です！ コラボコスチュームこそ、当ててみせます！」

「そうだね」

意気込むソーンに向かって、メグメグは適当に相槌を打つ。ガチャよりもバトル。それがメグメグなのだ。

ふんすふんすと、気合い十分にソーンがコラボヒーローガチャを回す。

ドキドキと高鳴る胸を押さえ、ソーンは聞こえるそれに集中し——

「ワテクシは美の化身ヴィーナス！」

——崩れ落ちた。

排出されたのはソーンのコスチュームではなく、ポロロッチョのコスチュームだったのである。あまりにもな仕打ちに涙さえ零し始めたソーンに、メグメグは。

「何で泣いてるの？ 出なかつただけで？ え、全然分かんないな——」

ぐすぐすと嗚咽を漏らすソーンの頬を横から突きつつ、不思議そうに呟くだけだった。

そんな、入りづらい部屋に入室を果たした猛者が一人。

「？ 何でお前ら入らないんだ？ 無料単発引かねーの？ ……あ、メグメグにソー、ん？ 何かあったのか？」

部屋の外へ向かって声をかけつつ、アタリが入ってきたのだ。彼は

泣き崩れているソーンを見て、困惑しつつも近寄った。

「よしよし、どうしたんだ？ ……カードが当たらなかつた。まあそれくらい日常茶飯事だ、泣くことないって。まあ、発狂して暴れ回られるよりは遙かに良いけどな。 ……コスチュームが当たらなかつた？ アダムとお揃い？ ははーん、なるほどな。よし、ちよつと待つてろ！」

慌ただしく部屋を出て行ったアタリだが、流石はスプリンターと言ふべきか、ものの数十秒で帰ってきた。ポロロッチョを連れて。

「ただいま！ で、ポロロッチョ。お前ソーンのコスチューム当ててたよな？」

「ええ、その通りよ。 ……とここで涙の跡があるわねチェリーパイ。よし、とりあえずキスをしましょう」

「こ、こら！ いきなり距離を詰めるな！ ソーンがビツクリするだろうが！」

そつと顎を持ち上げられたソーンの目前に分厚い唇が迫ってきた事に、声のない悲鳴が上がったところで、アタリがポロロッチョをソーンから引き剥がす。ちなみにメグメグは楽しそうに傍観していた。

別の意味で涙目になったソーンがメグメグの後ろに隠れ、アタリがポロロッチョを牽制しつつ話し始めた。

「ポロロッチョはソーンのコスを当てて、ソーンはポロロッチョのコスを当てた。なら当てたコスを交換すりゃいいんじゃないかね？ と思つてな。勿論二人次第だし、無理強いもしない」

「えつ……」

ソーンがポロロッチョとアタリを交互に見つめ、不安そうな顔になる。その顔が具体的な不安を表していた。

「大丈夫大丈夫。ポロロッチョは人を襲つたりはするけど、服をどうこうしたりはしないから」

「ほ、本当ですか？ それなら……えつと、交換を

して頂きたいのですが……構いませんか？ ポロロッチョさん」

「勿論構わないわ！ 代わりと言つては何だけど、お兄さんの事をお

話してくれないかしら?」

「兄様ですか? それは構いませんが」

コスチュームのために、アダムが犠牲になった瞬間である。まあ、彼も弟のためなら苦虫を噛み潰した顔で我慢するだろう。

「感謝するわチェリーパイ! お礼に抱き締めてあげる!」

「ハイそこまで!」

かばりと両腕を広げたポロロツチョコからソーンを庇い、アタリがコスチュームを素早く交換してポロロツチョコを追い出した。

「じゃ、これで問題は無くなったな。ソーンも泣く時は場所とか選べよ? 気になる女の子の前で泣くのは後々恥ずかしいからな。じゃ、俺はこれで」

「へっ!? は、はい……!」

にっと笑って颯爽と立ち去るアタリを、恥ずかしさで頬を染めながらソーンは見送る。状況を思い出して、メグメグの顔が見れないソーンに、メグメグは特に何も思うことなく言った。

「それじゃ、ダムダム誘ってバトアリ行こ!」

東西たかさん広場。

段差のない平面であり、ポータルが密着したステージである。

そこには、既に六人が待機していた。

紅<sup>レッド</sup>チーム。

カラバリの黄メグ。進撃コラボコスのソーン。同じくコラボコスのアダムの三人。

蒼<sup>ブルー</sup>チーム。

十文字アタリ。ボイドール。深川まといの三人。

「うえ……嫌なのに合っちゃった」

「? 嫌なの、ですか?」

「ゾーン……あの三人の固定はな、シエアハウスでひっそりと囁かれているんだ。最強初期固定組、と」

「さ、最強……?」

待機中にそんな事を言われ、ゾーンが思わず敵チームへと視線を向ける。和やかに会話している彼等に、最強の二文字は似合わないように見えた。

「アタリんほんつと強いんだよねー。HS溜めさせないようになきゃ」

バトルジャンキーのメクメグが、珍しくそんな戦術的な事を言い始める。いつものメクメグを見ているゾーンが目を丸くするが、メクメグの意見にアダムも同意したため、認識を変える。

アタリは要注意と、頭のメモに書いておく。

そうして、バトルは始まった。

「気付けに何匹か潰そうっと」

「タイムリミットギリギリまで遊ぼうぜ」

《紅<sup>レッド</sup>チームの皆さん、準備はよろしいですか? バトルの始まりです》

まず一番目の自陣ポータルキーであるAに向かってゾーンが駆け出し、メクメグとアダムがBポータルへ。

スプリンターであるアタリとボイドールが裏取りに来た際に対処するため、アタッカーであるアダムが付いてきているのだ。

「俺の物にするー!」

《キーを奪われました》

「少し冷えるのでご注意を!」

《キーを獲得しました》

ゾーンがAポータルを取るよりも先に、アタリがEポータルを獲得する。どうやらHSを溜めようとしているようだ。

メクメグとアダムは瞬時にアイコンタクトを交わし、メクメグはEポータルへ行き先を変更。アダムはBポータルへと走り続けた。

「制圧など造作も無い」

《キーを獲得しました》

Bポータルを獲得したアダムは、拡張をゾーンに任せてメクメグに加勢するべく走り出す。遮蔽物を抜けた先では、メクメグがボイドールに攻撃を食らっている所だった。

「発射」

「あれー、体が動かないよ?」

ボイドールによって放たれたのは【雷霊の加護 ワキンヤン】で、ダメカ無しガンナーであるメクメグには直撃だった。

慌ててメグメグとボイドールの間に割って入る。アダムは【全天首都防壁 Hum—Sphere LLIK】を張った。

「守護障壁を展開。カラドボルグ!」

「カピツ……これは耐えられます?」

アダムの【楽団員 サンバル】を、ボイドールは予知していたかのように【反導砲 カノーネ・ファイエル】を発動させる事で打ち上げを防ぎ、ガードブレイクを行った。

無駄のない動きは経験に裏打ちされた計算である。初期最強と呼ばれる所以を垣間見て、アダムは闘争心を燃やし始める、が。

「どけどけー!」

「のー!」

アダムという肉壁を失ったメグメグは格好の獲物。ダツシユ攻撃——DAを当てられ、体力が削られる。そこへ聞こえるシステムボイス。

《味方が倒されてしまいました》

は? 啞然とするアダムの視界に、悠々とBポータルを奪おうとしているまといの姿。それを視界に入れた一瞬後、地面に着地。

リス地を見れば、ゾーンが復活してきていた。ガンナー対決はまといに軍配が上がったようだ。いつの間に行われていたのか……。

しかし、流石に自陣ポータルを取られる訳には行かない。メグメグには申し訳ないが、踵を返してBポータルへ向かう。ポータルを踏めば、まといはニヤリと笑ってアダムを振り返った。

(何だ……?)

凄まじく嫌な予感を覚えたアダムは、咄嗟に背後を振り返る。そこ

には、珍しく戦術的撤退によって逃げてきたメグメグが。

そして、その背後には。

「3Dには負けねえ！」

「HSが溜まって……!? く、クソがッ」

「8bitの底力ー！ 見せてやる！ ドットモンスター軍団、参上！」

まといの誘導にまんまと引っかかり、うっかり自陣へ引き返してしまったのが運の尽きと言ったところか。無論、引き返さなくてもBポータルを取られてしまえば勝率はかなり下がるのだが……。

やはり年季が違う。

初手をほんの少し違えただけで、ここまで追い詰められるとは！

「だが、こちらにはガンナーが二人！ 遠距離から攻撃すれば良いだけの事だ！」

「威勢が良いねえ。やれるもんならやってみな！」

まといの挑発に、復活してきたソーンと、体力半分のメグメグが応戦するべく武器を構える。

「ダメカ張ったって、貫通には効かないもんね！ 覚悟してよね、アタリンー！」

「さあて、どうかな？ ——ボイドール！」

「分カツテイマス」

メグメグとソーンの背後から聞こえる声に、慌ててメグメグが振り返る。

ソーンは反射的に【全天首都防壁 Hum—Sphere LLIK】を張る。それがソーンの命を救った。

「接触禁止」

「あれー、体が動かないよ？」

「メクメグさ……っ！ ヴエテロク・ツアーリ！」

ボイドールの【\*絢爛ノ美\* ボラ&amp;アルヒコ&amp;アペイロン】によってスタンにかかったメグメグ。そしてダメカでスタンを回避し、慌てて【祭り開始！ どでかい和太鼓】を発動させる。

サイレントにかかったボイドールには、ガードブレイクも出来な

い。しばらくはボイドールの時間は稼げるが、アタリは……。

「お助けキャラだぜ。どけどけー!」

「ぐっ……騎士の守護術を見せてやる」

アタリはボイドールにスタンさせて、キルを取ろうとしていたのはなかったのか。

何故、兄様と戦って……そこまでソーンが思考したところで、はたと気付く。

まといは、何処に居る？

「ようやく気付いたかい? ——ぶっ飛べー!」

「うああ!」

まといに【爆裂アークウイザード】めぐみん】でガードブレイクさせられる。ソーンはギリギリ生き残ったが、この体力ではすぐに……。

慌てて立ち上がるも、既に遅い。

「まとめてぶっ飛びな!」

「カミサマなんていないよ?」

「お稽古とは、違いますね……」

《味方が倒されてしまいました》

味方を連続キルされた事に顔を引き攣らせるアダム。そんな彼に追い打ちをかけるように、

「余所見してていいのか?」

「ここを制圧するのが、勝利への近道です」

《キーを奪われました》

「あたいが貰った!」

《キーを奪われました》

敵陣Dポータル、そしてCポータルが奪われる。

実際これで2―3なのだが……、有利なのは言うまでも無くアタリ率いるチームである。

そしてアダムの守りも永遠ではなく、ダメカは切れる。そこへアタリは一気に突っ込む。

「俺のほうが強いっ!」

「屑どもがあああ!!」

《味方が倒されてしまいました》

大音量の罵声を不意打ちで食らったアタリが肩を跳ねさせる。そして慣れたようにさつとBポータルに触れた。

「ここも2Dにしてやろうぜ」

「ここは譲れないよ!」

《キーを奪われました》

一人で取っていたら復活したメグメグとゾーンに阻止されると踏んだまとも合わせて二人でポータルを奪う。

それでも間に合わない可能性を徹底的に潰すため、ボイドールがAポータル付近で敵を牽制する。自陣二番目を取られて悔しそうなユリーエフ兄弟。

「9秒で決着つけてあげるね? メグメグはラブリーでしょでしょ?」

しかしその悔しさを意に介さないバトルジャンキーが一人。

最近リリカにゴリラだのと言っていた癖に、戸惑いもなく自分で【創霊の加護 タイオワ】を使用する奴がいた。メグメグである。

「きったねえ顔で近付くな!」

「カピツ!」

「はらわたをブチまけろ!」

「あ…、アウローラ! 氷よ!」

「失せろ。砕けろ」

「ていつ」

メグメグが【紅薔薇の暗殺術 クルエルダー】で引き寄せたものの、あと一歩というところで逃がしてしまう。

ボイドールのアビリティが発動し、あつという間に逃げ切られてしまったのである。しかし深追いは必要ない。今重要なのは、アタリのHSを消す事だ。

「レトロゲーに感謝しろよ。準備万端でいくぜ!」

その目的を悟ったのか、アタリは【秘めたる力の覚醒】と【究極系ノーガード戦法】を発動させ、三人に向かってきた。

アダムはそれを良いことに【反導砲カノーネ・ファイエル】で迎え撃つが、効果範囲直前でアタリがピタリとその場で止まる。

そしてしてやったりと笑うと、今度は本当に突っ込んできた。その流れのまま【機航師弾 フルーツ・ツオイク】をソーンに放つ。

ダメカを張る間もなかったそれで、アタリのHSで削れていた体力が更に削れ、空へ打ち上げられる。そこへまといの大砲が直撃し、

「これで静かになるだろ」

「兄様……ダメ、でした……」

《味方が倒されてしまいました》

「ソーンツ……」

「抉っちゃうぞー!」

「つてえ……あ、」

メグメグの【荒れ狂う天空王 ふれいずどらごん】によって、アタリの体力の半分以上が削れた。

「あっは、HS切れたねアタリン!」

「んー。じゃ、貰うな? 100ギガショーク!」

「えっ」

「3Dには負けねえ!」

アタリが【革命の旗】でメグメグのHSを吸い取った。アタリが周囲カード、しかもHS吸収をデッキに入れているとは思わなかったメグメグがぼかんとする。

しかし、先程アタリにキルされてデッキを見ていたアダムは避けていた。

「……………。……………ダムダム?」

「す、すみませんメグメグ殿。言う時間がなく……」

「8bitの底力ー! 見せてやる! ドットモンスター軍団、参上!」

「……………」

「……………」

「全てを吹き飛ばします」

「勝利をクリエイトするぜ!」

《味方が倒されてしまいました》

回復を終えたボイドールのスタンを食らい、アタリによって呆気なくナタデココと化した二人。リス地で立ち尽くすゾーンを復活直後に目にし、嫌な予感のまま見下ろしてみる。

HSを溜めつつアタリに必要なだけの加勢をしていたまといが、目の前で陣取っていた。

「あたい意外と器用なんだよ。——ワツシヨイ！ 御代は見てのお帰りだよ！」

まといの後ろでは、アタリとボイドールがAポータルを奪取するべく踏ん張っている。

「これが、最強初期固定組……か」

諦めたようにアダムが呟いたと同時に、試合終了のシステムボイス。

《バトルが終わりました》

《負けちゃいましたね》

「レトロゲームも良いもんだろ」

「アタリん下方まだー？」

「アリマセン」

「ボーボー下方まだー？」

「アリマセンヨ」

「……まといさんの下方はないのでしょうか」

「アリマセン」

「もー!! 初期ヒーローだけ強いんだけど! メグメグももつと上方してよ!! ボイボイ、メグメグがラブリーだからってステ低くしてるんだー!」

「シテマセンヨ。八ツ当たりハ止メテ下サイ」

「初期ヒーローだけ、ズルイー!」